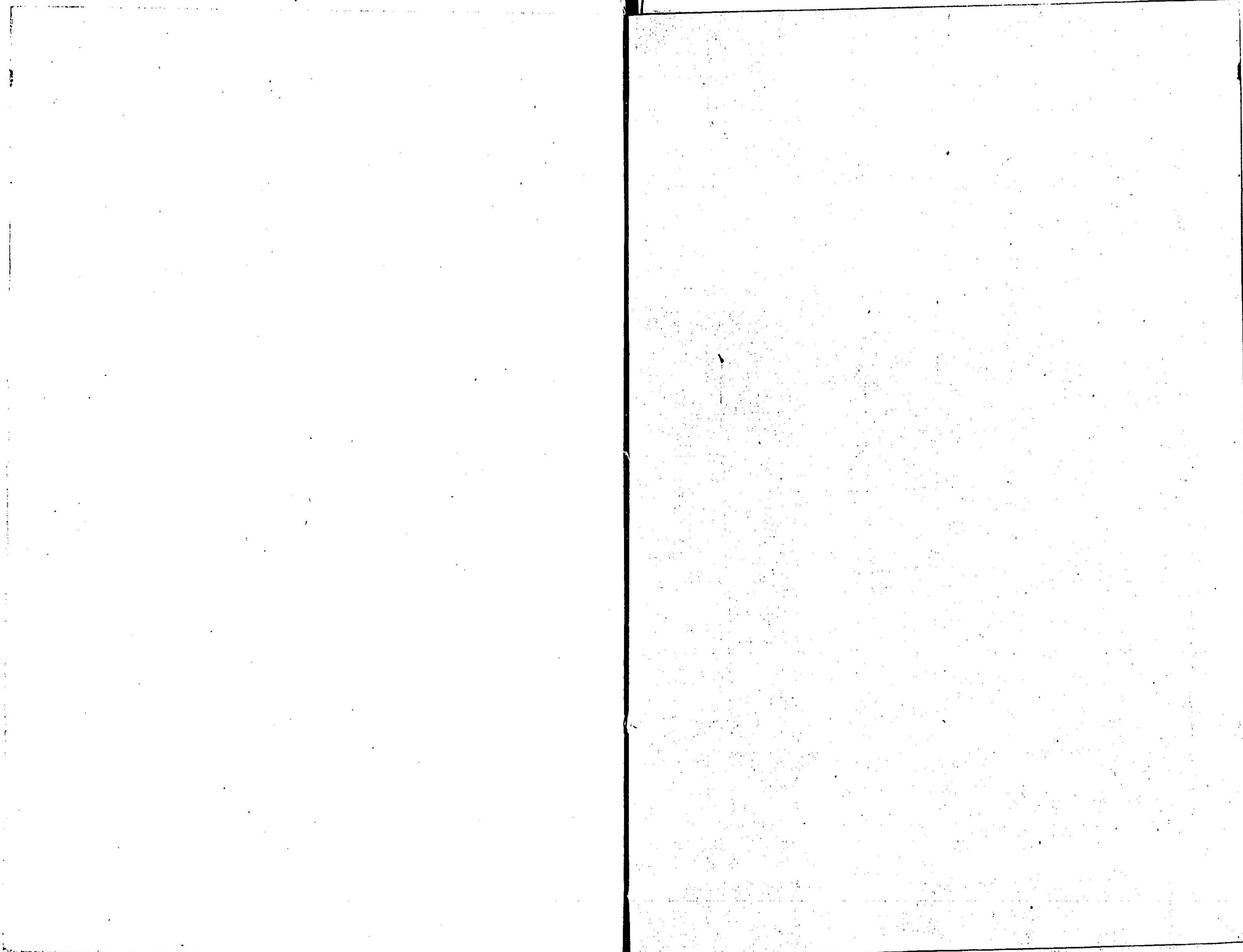


特42  
446

山橋柱通皇  
塔門垣藏帝  
五

訂  
親  
書  
卷  
四  
目錄































し鐘かね道みち大おほ匠しやうの精せい靈りやうありあり也や此こゝ

唐たう純じゆん愛あいししのの子こ妻つま也やのの也やままののな

たたののままききんんとと浦うら方かたととももつつくく亭てい瑞ずい

ととかかんんのの南なん無む天てん形かたち皇すう王わう我われ劍けん降くだ鬼き

也や和わ文ぶんととととああのの駒こまはは繁しげ々々唐たう帝ていとと

翔たぎつつててしし馬まののままりり 妻つま累かさね鬼きのの気きとともも

よりよりももつつくく 勢せいももつつくく 勢せいももつつくく 勢せいももつつくく

柱はしらかからられれききるるとと鐘かね道みちのの精せい靈りやう馬まよよる

打うりりたたちち利り劍けんををひひつつけけをを夜よととあありり

明あ玉たま鏡かがみよよししるるひひ給たまへへもも鬼き神かみのの波なみ

かからられれのの 妻つま鬼き神かみのの通とほ力ちから自みづか在ありり

ううききもも 杖つゑととももままるるひひつつももししるる

出いででままるる上かみのの宮みやつつららのの殿とのををととひひ打うりり

六む宮みやのの玉たま階かゝよよききああるるととももつつくくししるる











浮世のちまた悲しく三廿二 暗濤

月を帯して清きあゝ三 舟はたかくあ

まのかりゆき更なるて管よりうらぐあ

あゝ雨の声三 雨は通し内あゝての音

しるおもあさねの夢より現るは經の色

ぬきよしましつゝあゝも楫多きと志

のちからを押し入て聴きまゝもやと思ふ

甲上

たうや此あゝとけ中よ音する三 海

定めの海より釣舟の甲 ちをあらふ

さき細る波はちくちくを給へ三 舟よ

随ひらよせまね甲 二人の僧の岩

あゝ上三 けりぬ舟の陰甲 舟

火の陰を假初め經を舟に讀誦する

舟三 舟をいづる三 舟の思三 舟







う。妻くは物語人 （下白） 信乃とく或

し。ねえの海も空も白くして中も

小宰相の房々や諸友は物語人

（上） 去程の平家の二門馬を改め海

士の小舟を繋うつづ月棹の持

あり （下） 家たもも釣りきりま

浦さる敵なれしりまてさるる借

む。さす花のさう鳴や後路かひの

あり （中） さすよきり （下） 去程の

の房乳母をちつさあや行と加思

が （下） 秋東もさる都もさる浦威

討 （下） 討めねと頼みくありさる此海

沈 （下） 沈まきとてさる後流し手を取組

り （下） り （下） 去あてもこの海は



去りましまししめ 況しんまのり  
 後の意て信り現 上書同 西へとも月  
 欠く其方もみくの大方の雲の  
 衣や履しんあきも共よ曇る宛  
 乳母あくく多付て此時のお思ひ  
 一人は信りんさきとまり終つて清衣  
 乃袖よあつてさきさきと海へ入る

乃く考人も同くあつた感のみ  
 つとゆききく 軍上書 此の油の楷ひ  
 了く一人も使しぬ方便品と兼用  
 如新昔の願 今者已満足  
 他一切の生 皆今入仏道 通感又  
 出纏より きく立海 良の 甚なる新  
 此法は やあ 上 さき もあつてもあつた







あつらふはるる。角威も異陸天あり  
まのしきく我陣はゆり。小宰相の房は  
向へ色既軍明目よまのまの痛  
りやは牙の通威なると。此うら頼  
女まのあつらふ。かも成るる  
勢まのうらまのあつらふ。た  
終つら孫情まのた。益角威釣まのら

あつらふはるる。角威も異陸天あり  
まのしきく我陣はゆり。小宰相の房は  
向へ色既軍明目よまのまの痛  
りやは牙の通威なると。此うら頼  
女まのあつらふ。かも成るる  
勢まのうらまのあつらふ。た  
終つら孫情まのた。益角威釣まのら



具志<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>養<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>能<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>守<sup>ト</sup>が<sup>ト</sup>才<sup>ト</sup>  
と<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>由<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>程<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>能<sup>ト</sup>  
た<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>行<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>無<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>前<sup>ト</sup>  
か<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ぬ<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ぬ

去<sup>ト</sup>程<sup>ト</sup>今<sup>ト</sup>戦<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>但<sup>ト</sup>馬<sup>ト</sup>守<sup>ト</sup>經<sup>ト</sup>  
正<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>討<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>薩<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>  
忠<sup>ト</sup>度<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>果<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup> 恩<sup>ト</sup>部<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>六<sup>ト</sup>孫<sup>ト</sup>を

忠<sup>ト</sup>度<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>討<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>天<sup>ト</sup>暗<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>威<sup>ト</sup>

ま<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>討<sup>ト</sup>死<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>侍<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>  
ま<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>み<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>敵<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>往<sup>ト</sup>  
人<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>原<sup>ト</sup>五<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>章<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>鞭<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>  
て<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>威<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>  
う<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>か<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>甲<sup>ト</sup>  
乃<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>ち



たしけりし人共は修徳の者な  
まゝありしをたゞすむるに  
てし給へりキリ讀誦の音もあはれ  
要鬼のうらみもあはれ慈悲の  
姿もく美蔭もあはれ其成仏  
必腹のちとあはれその秘きく

松垣

甲子

是より肥後松國岩戸と申す  
居住の僧もくは母も此岩の  
觀世音の尊像の勝のほりあり  
の物も手籠の可の致景とあり  
南西の海雲漫として萬古に  
守あり人またあはれ慰むる



致景あつてく錦軍とけふまへは  
 住の靈地と思ひて三年の向の春  
 信つらまつりて公家又百も及  
 後とてたままき若女毎日あつる水  
 せぬく事つるも白もあつて  
 第女あつる者うらなひと事りもと思ひ  
 せき白の氷くぬる月も秋

屋ぬるうらなひと事りもと思ひ  
 歸原の女と思ひて向も又是同じ  
 貧家の親知もあつて賤いよ  
 故人うらなひと事りもあつて  
 露命まきまつる霜塔よ似た  
 下等  
 水けきよの具もあつて  
 上等  
 愛の可も白のく







きるかあし讀しを臺のうなる昔  
 筑前の大宰府よるよ核垣志つ  
 ひく信し白拍子なよの裏しく此白  
 けの邊に信也甲なよの  
 中にある其志つりたるりあるり  
 藤原の興範通りし時女水也あ  
 ねとこりきたまひし信其水也

甲しあすのうとく  
女類し也上うもつるを  
 唯白行乃水はあき考りある  
 空をうりつる女とあつる其  
 志つるをいふ路り彼白の信と  
 甲あて我辭をいふ路り  
 まらねて女もきりく甲あき

Asket

H



古の松垣の女候よあつらぬ我の詞を

かうきさうさうもさうしん事候上亭持

うし思ひあつらふ事さきり上少

昼もやく目も言多しかくは霧

少くさきさきり陰よりあつらぬ灯の

候下あつらぬ事さきり

下女候 判りあつらぬ事さきり有難し弟に

や那上風緑野よあつらぬ事さきり

てあつらぬ事さきり

月桂まも也朝よ紅顔あつらぬ事

路よたのしむ事さきり地女上白骨

とあつらぬ事さきり女あつらぬ事

有様地あつらぬ事さきり女あつらぬ事

乃きさつらぬ事さきり日あつらぬ事



あつていふや若少とらつても金家あ  
 替りてさきつて期とさつた事さうま  
 臧とぶきつらして報つて具と期分  
 けん上キカカキもあさしてあつた  
 人ありたあぐら安とあつたり  
 へしは跡とひてあきん女あつ  
 安と駈りして僧は法と妻は法

なり人よあつたり  
 中甲しま人よ顯つて有まつてわく  
 安とあつて女安くさつた  
 ちせつられれみぬ行ころ人と作白  
 けつらつらわら母若の安と取ま  
甲苦痛りたつた様もあつても執心  
 水とらつた痛白の安とあつても



後瑠

だやく深人給女我古の舞女のほ

まれ学よ胸き其罪ありて故よりの

ども苦きと三衛の熱鉄の桶を

為ひ猛火のつるもほきと此水と

中其水湯とあつて我をもやく

階におきれた此程に僧の値遇

よらわつてるあまき猛火のあ

甲上

はらう因果の妙をわん其執心を

あり控てさくさくひ給ふし

女

つらくはら僧のため此かき水

甲上

とほほる羅もあはらあまきと

思ふもあまほらよ衣の袂の露の玉

まき白く乃月を夜よ

甲上

りこまき水とあまほらあまきと



乃水よ影をこめて夜を月々のあかき  
大地 礼に砂皇の昇つぬ小湊の氷をくらん  
 ば衣の炉よ南風の業をたたく  
サレ 支汰のあがりちて氷よまもまきく  
 青きころの蔭よりちて蔭より深し  
 本れうきころの靴あつた今れ昔まき  
ト世 毛きくや増くぬる思ふる色

紅井の涙よりせとくひクセつお入乃  
 うも縄くうぬくまき古も紅花れ  
 春のあつた紅葉の秋めく雪も一目  
 若くそとやぬぬお糸の粧舞花  
 ほまれもらさあてはちとらうら  
 紅顔の翡翠れうら花志ほま桂の  
 まも霜ふつておよらうら南影若



松垣

裏がきほしてみらるゝまかゝるゝ思松  
 去秋のもくつ廣茶のうりきるす  
 うれしう悲まのうりもよと思ひ  
 物れあつち也具白の浪かき  
 上女 教原の興絶ぬ具のうり乃白拍子  
 してうと有しうの昔の花は神今ま  
 色もあつち夜ぐりうの袖をきりぬ

心をつらき陸奥のきよの細帯胸あ  
 ち花行どか白拍子具たもりまの有  
 うれしく支とても昔手刻し舞あま  
 上女 まりても今うかあま  
 志きりよ宣へばま  
 中 露うもれし舞出ぬ  
 下 牙果を 水むもつる乃縄の  
 女上 松垣の女乃  
 女上 魚紀  
 女上 袖







福よ受う梅子の母の世に入と意の此  
 あらうあてはりのまに作らるる業を  
 中よ受う梅子の母の世に入と意の此  
 母乃儻りゆか シテ女 相うくわするを  
<sup>男</sup> 梅子の母の世に入と意の此  
 おもひ梅子の母の世に入と意の此  
 てあつてはるまひて梅子の母の世に入と意の此

<sup>女</sup> 意の此よ受う梅子の母の世に入と意の此  
 てはるまひて梅子の母の世に入と意の此  
 早まらぬ梅子の母の世に入と意の此  
 夢であつた梅子の母の世に入と意の此  
 今れ人よ受う梅子の母の世に入と意の此  
 早まらぬ梅子の母の世に入と意の此



繪（巻）なる（巻）たみ（巻）くも（巻）はる（巻）残（巻）を  
と（巻）う（巻）え（巻）名（巻）残（巻）を（巻）く（巻）の（巻）行（巻）く（巻）ま（巻）り  
る（巻）も（巻）き（巻）母（巻）の（巻）あ（巻）る（巻）所（巻）に（巻）ウ（巻）獨（巻）り（巻）ま（巻）わ（巻）の  
あ（巻）の（巻）戸（巻）の（巻）う（巻）く（巻）明（巻）く（巻）音（巻）を（巻）て（巻）く（巻）は（巻）時  
そ（巻）の（巻）心（巻）を（巻）し（巻）る（巻）を（巻）慰（巻）む（巻）よ（巻）ら（巻）い（巻）ま（巻）て（巻）入（巻）  
下（巻）我（巻）東（巻）を（巻）神（巻）も（巻）こ（巻）の（巻）花（巻）候（巻）や（巻）姫（巻）の（巻）若（巻）氏（巻）子（巻）  
ま（巻）る（巻）如（巻）を（巻）桜（巻）子（巻）と（巻）あ（巻）ら（巻）く（巻）こ（巻）の（巻）鈴（巻）は（巻）ら（巻）あ（巻）ま（巻）

た（巻）は（巻）優（巻）う（巻）た（巻）し（巻）る（巻）故（巻）郷（巻）の（巻）今（巻）の（巻）行（巻）より  
明（巻）暮（巻）を（巻）だ（巻）て（巻）住（巻）入（巻）す（巻）才（巻）あ（巻）ら（巻）ひ（巻）の（巻）我（巻）子（巻）  
の（巻）行（巻）魚（巻）壽（巻）口（巻）と（巻）信（巻）と（巻）味（巻）と（巻）ち（巻）と（巻）く（巻）か（巻）く（巻）  
深（巻）は（巻）物（巻）を（巻）か（巻）の（巻）揚（巻）か（巻）り（巻）く（巻）山（巻）路（巻）乃（巻）ま（巻）り（巻）  
了（巻）る（巻）也（巻）早（巻）河（巻）是（巻）の（巻）常（巻）陸（巻）國（巻）の（巻）寺（巻）乃（巻）  
恒（巻）僧（巻）を（巻）て（巻）父（巻）と（巻）母（巻）と（巻）は（巻）儼（巻）り（巻）の（巻）ま（巻）り（巻）あ（巻）ら（巻）ん  
ま（巻）り（巻）た（巻）志（巻）し（巻）る（巻）畏（巻）僧（巻）を（巻）頼（巻）ま（巻）し（巻）由（巻）信（巻）



程に仰希の契約をわけて公に  
 出たりし梅川さきく花の名前の  
 を感乃由中の程よき人の人を伴ひ  
 今梅川へとさきく上男の  
 もかのもれ花感く雲の枝乃陰  
 まがらふれ雲さきく松の葉色  
 下はさきく梅川さきく梅川さきく  
 下はさきく梅川さきく梅川さきく

二六二一ト三三 男  
 もさききりく 中か行さへ

出作う梅川さきく 中か行さへ

出作う梅川さきく 中か行さへ

見木も作花の今さきく

中か行さへ 男

面白き事乃女お狂のさきく

すくひ綱を掛く梅川さきく















女

尚人の我故郷は少祚をばらぬ花さくや

姫とやうくは祚禱の櫻可もて歩入るは事

の初書し我子色具御氏子あれは櫻

子と名付ててし<sup>上</sup>祚の<sup>下</sup>名も笑

や姫尋ら子れ名も櫻子あて又此川も

はくさ川乃名もあつ<sup>上</sup>の<sup>下</sup>花の散を

あしあもせし<sup>上</sup>也男もあつ<sup>下</sup>謂と笑ハ

面自のまなはるも縁き昔まよひたり

ままの<sup>上</sup>川より<sup>下</sup>此東路の櫻川に

はり<sup>上</sup>なも<sup>下</sup>まよひ<sup>女</sup>也<sup>河</sup>此川のあ

まはる<sup>上</sup>乃<sup>下</sup>遠き<sup>上</sup>た<sup>下</sup>つ<sup>上</sup>ま<sup>下</sup>く<sup>上</sup>乃<sup>下</sup>あ<sup>上</sup>は<sup>下</sup>あり

彼貫えり<sup>上</sup>ま<sup>下</sup>つ<sup>上</sup>の<sup>下</sup>あ<sup>上</sup>ま<sup>下</sup> <sup>甲</sup>う<sup>上</sup>ろ<sup>下</sup>と<sup>上</sup>昔<sup>下</sup>れ<sup>上</sup>貫<sup>下</sup>え

ま<sup>上</sup>づ<sup>下</sup>る<sup>上</sup>ま<sup>下</sup>ま<sup>上</sup>の<sup>下</sup>都<sup>上</sup>よ<sup>下</sup>る<sup>上</sup> <sup>女</sup>来<sup>上</sup>ん<sup>下</sup>も<sup>上</sup>時

ぬ<sup>上</sup>ひ<sup>下</sup>ら<sup>上</sup>れ<sup>下</sup>國<sup>上</sup>よ<sup>下</sup> <sup>甲</sup>名<sup>上</sup>も<sup>下</sup>櫻<sup>上</sup>川<sup>下</sup> <sup>女</sup>何<sup>上</sup>と























下  
 花の良りせぬこころありまゝに眞実  
 かの雨も鳴きこゝろ嬉しむの涙あふま  
 下キリ  
 かくてもあひまかろく母を  
 たまけ換りて仏果れ縁とありよ  
 下  
 きう二世安樂のえん深き親子の  
 下  
 道ありあつてもさへ

山姥

善光寺と影たのましく佛の御  
 寺尋せ 是の都方に住居はる者  
 きては又是は慶りのは事ハじむく  
 山姥とてかかれあまの遊女あては座  
 が換りは名を中謂き山姥の山あり  
 ともおとさるやと曲舞よ作りは唄ひ



育子よりの京臺部れやあつりては

此比の善きと人はいし有り有たさ由承

程よ果古傳中<sup>サレ</sup>の信濃國善きと

と急の都をわくさる良も志の浦

船てうれ行末のあつちれ山越く袖よ

露もつる玉に乃松がきて末ある都路

の様思かや家おりのら<sup>上</sup>おき<sup>ク</sup>梢波立

塩ありのつれあつちの松乃夕煙きぬ

うまふれ羅さまる陸のつらまらと

あま山を路うあつち三都路の國の事

金さく<sup>サレ</sup>の<sup>サレ</sup>勢をさる<sup>サレ</sup>は<sup>サレ</sup>の<sup>サレ</sup>も

恙もつりく<sup>サレ</sup>市急程よ果りも都

及切平の境守は<sup>サレ</sup>恙も<sup>サレ</sup>物自是よ

出せして程と道の様おもは<sup>サレ</sup>事あつち



ちりきりこぼれも常とこの常とこの西方の隆雲  
 千萬億本とうも果はつ又また深院しんえん未まゆみ  
 直路ちくろあれたつまるの山やまも遠とほくまありの  
 ちりきりこぼれも修行しゆぎんの極ごくあれたる業わざ也なり  
 果はつ留とどめ置おけらうらうししまりのの入い  
 道みち志しるるててたたひひ入い 羨うらやまししまま也なり  
 言ことままきき自みづかりりのの心こころのの俄たちにに暮くるるくくよ

相あ行ゆとと伴たりり時とき 三才上ああままくく極ごく人ひと住ぢゆう宿しゆく  
 果はつ留とどめ置おけらうらうししまりのの入い  
 道みち志しるるててたたひひ入い 羨うらやまししまま也なり  
 言ことままきき自みづかりりのの心こころのの俄たちにに暮くるるくくよ  
 果はつ留とどめ置おけらうらうししまりのの入い  
 道みち志しるるててたたひひ入い 羨うらやまししまま也なり  
 言ことままきき自みづかりりのの心こころのの俄たちにに暮くるるくくよ  
 果はつ留とどめ置おけらうらうししまりのの入い  
 道みち志しるるててたたひひ入い 羨うらやまししまま也なり  
 言ことままきき自みづかりりのの心こころのの俄たちにに暮くるるくくよ



第<sup>下</sup>搖<sup>レ</sup>び<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず<sup>レ</sup>年<sup>下</sup>力<sup>下</sup>の<sup>下</sup>智<sup>下</sup>か  
 里<sup>下</sup>鄙<sup>下</sup>乃<sup>下</sup>思<sup>下</sup>つ<sup>下</sup>て<sup>下</sup>と<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>一<sup>下</sup>具<sup>下</sup>為<sup>下</sup>よ<sup>下</sup>社  
 目<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>く<sup>下</sup>一<sup>下</sup>宿<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>て<sup>下</sup>の<sup>下</sup>あ<sup>下</sup>ち<sup>下</sup>  
 松<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>一<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>宿<sup>下</sup>久<sup>下</sup>具<sup>下</sup>の<sup>下</sup>思<sup>下</sup>も<sup>下</sup>  
 よ<sup>下</sup>ら<sup>下</sup>ぬ<sup>下</sup>ち<sup>下</sup>と<sup>下</sup>家<sup>下</sup>の<sup>下</sup>物<sup>下</sup>の<sup>下</sup>報<sup>下</sup>と<sup>下</sup>具<sup>下</sup>す<sup>下</sup>ち<sup>下</sup>れ  
 て<sup>下</sup>山<sup>下</sup>姥<sup>下</sup>の<sup>下</sup>奇<sup>下</sup>れ<sup>下</sup>一<sup>下</sup>第<sup>下</sup>と<sup>下</sup>は<sup>下</sup>可<sup>下</sup>ら<sup>下</sup>る<sup>下</sup>了<sup>下</sup>  
 ち<sup>下</sup>行<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>し<sup>下</sup>し<sup>下</sup>ん<sup>下</sup>の<sup>下</sup>宿<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>

ち<sup>下</sup>中<sup>下</sup>の<sup>下</sup>び<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>の<sup>下</sup>姥<sup>下</sup>と<sup>下</sup>て<sup>下</sup>の<sup>下</sup>あ<sup>下</sup>ち<sup>下</sup>遊  
 女<sup>下</sup>と<sup>下</sup>て<sup>下</sup>の<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>一<sup>下</sup>宿<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>此<sup>下</sup>奇<sup>下</sup>れ<sup>下</sup>決<sup>下</sup>第<sup>下</sup>と  
 屋<sup>下</sup>終<sup>下</sup>を<sup>下</sup>よ<sup>下</sup>一<sup>下</sup>気<sup>下</sup>の<sup>下</sup>山<sup>下</sup>姥<sup>下</sup>の<sup>下</sup>山<sup>下</sup>白<sup>下</sup>り<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>る<sup>下</sup>  
 と<sup>下</sup>作<sup>下</sup>ら<sup>下</sup>れ<sup>下</sup>る<sup>下</sup>意<sup>下</sup>面<sup>下</sup>白<sup>下</sup>や<sup>下</sup>具<sup>下</sup>の<sup>下</sup>曲<sup>下</sup>舞<sup>下</sup>よ  
 よ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>て<sup>下</sup>乃<sup>下</sup>美<sup>下</sup>名<sup>下</sup>報<sup>下</sup>祇<sup>下</sup>の<sup>下</sup>山<sup>下</sup>姥<sup>下</sup>を<sup>下</sup>の<sup>下</sup>あ<sup>下</sup>ち<sup>下</sup>成  
 者<sup>下</sup>と<sup>下</sup>り<sup>下</sup>ま<sup>下</sup>る<sup>下</sup>百<sup>下</sup>れ<sup>下</sup>と<sup>下</sup>そ<sup>下</sup>山<sup>下</sup>姥<sup>下</sup>と<sup>下</sup>の<sup>下</sup>山<sup>下</sup>は<sup>下</sup>位  
 鬼<sup>下</sup>女<sup>下</sup>と<sup>下</sup>り<sup>下</sup>て<sup>下</sup>曲<sup>下</sup>舞<sup>下</sup>も<sup>下</sup>も<sup>下</sup>さ<sup>下</sup>り<sup>下</sup>て<sup>下</sup>の<sup>下</sup>鬼<sup>下</sup>女<sup>下</sup>と



もくもく鬼のまじりては成る人成る

山は山女あはれ響り成り上あてはけり  
もも年比ふまよきつとせ給ふその聲も  
七露程もばりふる響りあはれやよ  
里たり下カの音を極めらるゝとて世情萬  
徳の妙花を用をた此一曲は故あ  
はれ志うらわらきも吊ひ舞

歌音楽の妙多の持ゆりをもあ  
はれなむらわらも編むとのうれ精性  
乃音前よまらるるをトカ恨とらふ山  
は鳥獸も鳴りてきとあまらうの  
山姥の志気身は送るのうら  
まの事とてあはれぬ山姥は  
送るの給へるトカ我國の山女



けりも愛の愛の愛の我名は徳を

守りて為せし徳ひは是れこそ是れ我名

執りては是れは是れは是れは是れは是れは

の徳も是れは是れは是れは是れは是れは

ぞも是れは是れは是れは是れは是れは

は是れは是れは是れは是れは是れは

暮らさばは月乃おきし實ひ給う

我も又真の姿を懸ては是れは是れは

きりては是れは是れは是れは是れは

急ぐは是れは是れは是れは是れは

此山も是れは是れは是れは是れは

其時我姿も是れは是れは是れは

後を舞はは是れは是れは是れは

具も是れは是れは是れは是れは



何のたのみのうきまらまは又よ神とたを  
ほくぬ家女の詞をたうへし上 相内夢  
吹笛のうぐさ色にわゆる谷のうま手まら  
あへまる曲次の月を色にまじりてあへく  
蕙物もこころ深谷やあへくあすこれ深  
谷やお室林よ骨をうづらぬ思あへく  
あまの業と恨を深野よ花と供とる

天人なにも幾生の善を後よら  
善悪不二行せむ恨行せむわらこわ萬

箇目前の境界をきこりうらうらとて  
いそほ物こころひまきりて思ふ事あへく  
ころ青巖の形を削とあきる水又ころ  
けう家よか碧潭の色を際出せ  
あも月もこころに陰より思ふ事



きーたるうほをせり其山塔までまー

まの ニテ 申さちお初ーこの夜

舞をうよもさうーあさるー我よあ

れ誇るうさよ ト 梁上のさうーあさる

の玉にらうほまはより 懸れあさる 舞詞人

あれ ニテ 舞よおねさうつれさきと 戴

眼のさりの身うさ ニテ 梅面のさる

けよ熱りの ニテ 行装瓦に鬼のめさる

こよひ始くみさ ニテ 行よたさる

いあー ニテ 上着 ニテ 鬼一口の雨乃あま

かきあつ ニテ まさる ニテ 具より ニテ 思

志ら ニテ 人位 ニテ 抄

乃よ ニテ 舞 ニテ 舞 ニテ 舞 ニテ 舞

書 ニテ 書 ニテ 書 ニテ 書 ニテ 書







住山家の真の山たるく海内く  
 答深く水清く 前より海水  
 志高くして月並みなりをき  
 後より願松まきして風常樂の夢を  
 驚く 志高く海打く雲高くは  
 心して居深しして身熱くは  
 心して居深しして身熱くは  
 心して居深しして身熱くは

松ぼつあくも争ひ身のきすは物と  
 又伐木丁として山はゆるよ  
 性争うひして上求ま程を顯し  
 明谷深し粧り下化をまを表して金  
 精隆よ久の山姥の生前も志高く  
 富もあつて雲を傳へては  
 心奥もなす 多知事の人向ふあり



ちく。隔つる。雲の。影を。さす。つら。つら。の。自。性。を  
 変。化。し。て。一。念。化。生。の。家。を。あ。つ。て。自。前。の  
 業。れ。其。邪。正。一。如。と。み。る。時。の。色。即。身。の。空  
 を。ま。る。ま。る。の。法。有。ま。る。世。法。有。煩。悩。有。れ。の  
 喜。提。の。つ。る。佛。あ。ま。の。位。有。あ。り。完。生。あ  
 り。ま。る。山。う。ら。も。の。り。柳。の。み。る。花。の。紅。井  
 の。色。を。相。人。向。は。遊。ぶ。る。子。ガ。対。の。山。賊。の

松。路。の。通。る。花。の。陰。は。し。た。も。あ。り。席。を  
 か。し。月。徒。を。よ。し。と。出。雲。の。山。の。い。ま。も  
 あり。よ。又。或。時。の。戀。娘。の。い。ま。も。あ。り。た。り。る  
 ま。る。ま。る。入。る。枝。の。影。を。さ。す。つ。ら。つ。ら。の。筋。績。の。富  
 よ。身。を。直。人。を。助。あ。り。ま。る。ま。る。の。疑。心。の。乃  
 目。よ。み。る。の。鬼。と。も。人。の。心。を。見。上。レ。テ。心。を。見  
 蟬。の。唐。衣。の。み。る。の。神。の。心。を。見。上。レ。テ。心。を。見











